

浄土

1984-12

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和五十九年十一月二十五日印刷 昭和五十九年十二月一日発行
第五十卷
十二月号



昭和60年度版

浄土宝暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和60年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

1部単価 65円 (200ブ以上 60円)

送料実費 (300ブ以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであら
かじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

..... お申込み

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187

十二月号



もし衆生ありて、其の光明の威神
 功德を聞きて、日夜に称説して、
 至心不断なれば、意の所願に随い
 て、其の国に生ずることを得て、
 諸の菩薩、声聞、大衆の為に、共
 に歎誉して其の功德を称せらる。

——『無量寿経』光明歎徳章

目 次

法 話

見えない仏教……………竹 中 信 常……(2)

白檀の香り……………佐 賀 和 章……(7)

——故インディラ・ガンジー首相を偲んで——

《世相評談》

一年の回顧……………高 橋 良 和……(12)

エッセイ

セントルイスの夏(二)……………木 下 隆 一……(18)

連作短歌・挽 歌 ……………故 佐 竹 隆 三……(10)

寄 稿

『法然上人文状』の覚書……………石 畠 俊 徳……(26)

——阿弥陀護摩一七箇日支度事——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第6回 ……………寺 内 大 吉……(35)

前章・絶唱の経典 (六)

挿絵 松濤 達文

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(24)

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

見えない仏教



一

最近では戦後第二の仏教ブームだといわれている。町の本屋には「仏書コーナー」が設けられ、お経のカセットまで売っている。並ん

たけ なか しん じょう
竹 中 信 常

(大正大学名誉教授・文博)

でいる本をみると経典の解説とか各宗派のガイドブックのほかに、かなり高度の内容のものがある。そしてそれがブームといわれるだけに結構売れているらしい。

こうした仏教書を人々はどういう積りで買うのだろうか。むろん仏教のことを知りたい

からだろうし、また現在のわずらわしい生活の中に心の依り所、心の安らぎを求めるためでもあらうことは確かである。しかし、少しく考えてみると、仏教を含めて宗教というもののはただ文字を読んでなるほどと思うだけのものではない。本を読んで仏教についての知識をいくら蓄えても、それで心がやすまるものではない。一休禪師の歌に、

釈迦といういたづらものが世に出でて

多くの人を迷わすかな

というのがある。生じいに知識を得たばかりに反って分らなくなるのである。「知らぬが仏」の反対である。「生兵法は大怪我のもと」というではないか。知識・教養を高め深めるために仏教書を買って読むことは決して悪いことではない。ただ、大切なことは「読み放し」にして、書いてあることを生活の上に実際に活かさなければ、それは「絵に描いたボ

夕餅」にすぎない。

二

仏教の本を買って一所懸命に読む人々がいる一方、むずかしい理窟や教えは抜きにして、お寺参りや墓参りに精を出し、お寺の行事にも欠かさず参加する人々がいる。特にお年寄りに多い。本年五月にNHKが調査した世論調査では、現在の日本人の六九パーセントから八九パーセントがよくお寺参りをして、現代日本の「第一級の国民的宗教行事は墓参りだ」といっている。曹洞宗でおこなった調査でも、自分のお寺にお参りするものが七八・四パーセントになっている。何のためにお寺へ参るのかというと、葬式・法事のためにというものが七七・六パーセント、施餓鬼とか彼岸会とかいった寺の行事に参加するためと答えたものが六一・七パーセントとなっている。三分の二以上の人々がお寺参りをしているの

である。御先祖供養などでお参りすることは大変結構なことである。しかし、これまた少しく考えてみると、彼岸だから、命日だからといってお寺へ行って本堂にお参りし、お墓の前で手を合わせる。ただそれだけでよいものだろうか。それが御先祖とどうつながっているのか。そしてまた自分自身にとってどういう意味を持っているのか。ただ何となく、いつもしているからとか、親の代からしているからとか、といって、いわば慣習化してはいないだろうか。ことに現代のように社会状況が複雑になり、家族構成が変化してくると、「御先祖」についての考え方もちがってくるし、「代々のしきたり」なども余り重んじられなくなってくる。またアパート・団地・マンションの生活がふえ、隣り近所のつき合いが少くなり、土地との結びつきが疎遠になってきた。こうしたことから、現代日本の社会においては、宗教事情が大きく変わってきている。

三

日本には神道・仏教・キリスト教・新宗教（例えば佼成会・救世会・創価学会など）があるが、そのうち（神社）神道は氏神・鎮守などを中心に主として地域社会（村落・部落）と結びついており、仏教は祖先崇拜・菩提寺などの関係から檀家つまり「家」との結びつきが強かった。これに対してキリスト教や新宗教は地域とか家とかとの関係ではなしに個人個人の信仰による場合が多い。ところが近頃のように地方から都市へと人口が移動し、しかも団地やマンション住いが多くなってくると、故郷の村の氏神や家代々の菩提寺とは段々疎縁になり、自分の好みの信仰に入るようになる。新宗教のはやるのもこうした事情によるところが多い。つまり「信仰の個人化」である。その上、科学思想が発表したために、昔ながらの神様・仏様・天国・浄土などというも

のについての考え方がちがってきた。つまり神は天国に、仏は極楽に、人間とは別の所にいて、人間が死ねば天国や極楽に救いとして下さるというのではなしに、人間の心の依り所として、人々の毎月の暮しの中においてになるのだという考え方が強くなってきた。よく引用されるのだが、「あなたは宗教を信じていますか」という質問に対して、七五パーセントの人が「(特定の)宗教は信じない」と答えている。そう答えた人に改めて「しあわせになるために宗教は必要ですか」と問いたおしたところ、六五パーセントの人が「必要だ」と答えている。つまりこれまでのいわゆる宗教、例えば仏教、それも天台宗、真言宗といった特定の、形のある、目に見える仏教は信じない。しかし、「人間はパンのみにて生くるにあらず」といわれるように、自分の外側にある「もの」だけで生きているのではない。自分の内側にある「こころ」こそ大切なのである。仏教もそうである。外側にある

経典や教義だけが仏教ではないし、ただ法事や墓参りするだけが仏教であるのではない。お経に書かれている教えを自分の心の中にとり入れて心の糧とし、その教えのように日々の生活を送ることこそ「仏教」ということになるのである。このことを宗教の「内心化」「倫理化」という。このような仏教は心の中にあるのだから外側からは見えない。つまり「見えない仏教」である。

いふなれば、われわれが普通考えている仏教は「見える仏教」なのである。仏教というとすぐにお寺・お経・僧侶・お墓・法事・葬式などを連想する。こうしたものはすべて目に見えるものである。また、「仏教とは何ですか」ときくと、「ハイ、仏教というのは……です」と教えてくれる。「禪宗というのはどんな宗派ですか」とたづねると「禪宗とはこういう宗派です」という説明がかえってくる。「往生とはどういうことですか」と質問すると、「往生とはこの世から仏の浄土

へ行き生れることで、お念仏を唱えれば必ず往生することができのです」と浄土宗の坊さんは教えてくれる。教えてくれれば「なる程そうですか」と受けとることとなる。いわば「与えられた仏教」ということになる。しかし、デパートの既成服売場で自分に合った洋服を買ってくるように、お寺へ行つて好みの仏教を買ってくるというわけにはゆくものではない。

四

終戦直後、家は焼かれ、物資は不足し、たべ物も少なく、体も弱つて病氣になり勝ちだった頃、信仰すれば病氣もおさる、金も儲かる、家庭も平和になるとすめられて、人々は薬にすがり、色々の新宗教に走つたものである。貧・病・争の三つから脱れるために人々は争つて新宗教の門をくぐつたのである。その結果人々は果してしあわせになつた

だろうか。なるほど物は有り余るほど沢山になつた。家も団地位いながらある。衣服も充分に揃つた。医療も確かに進歩した。しかし病院にはいつも患者が群れをなしている。毎日の新聞をみると強盗・殺人・詐欺・横領・自殺・暴行など絶えることがない。世の中は少しもよくなつてはいない。なぜだろうか。人はたべ物とか住いとか服装とかだけでは、しあわせになれないからである。物の豊かさではなしに、心が豊かにならなければしあわせはやつてこない。たとえ一皿の料理でも、健康に働いて空ッ腹にかきこめば山海の珍味にまさる。ミンクのコートでなくとも、自分の額に汗して稼いだお金で買った外套の方が暖かい。しあわせは、自分が、自分の「心」でつくり上げるものである。

しあわせをつくり上げる「心」をつくるのが「見えない仏教」なのである。



白檀の香り

— 故インディラ・ガンジー首相を偲んで —

佐賀和章

(東京・港区法音寺住職)

十月三十一日昼すぎ、テレビを見ていた私は、ニュース速報のテロップにとび上りました。——インド・ガンジー首相が腹部を撃たれて病院に担ぎ込まれました——。つづいて

——首相は今朝（インド時間）公邸で腹部に八

発の銃弾を浴び、医師団によりただちにその摘出手術が行なわれていますが重体の模様、尚犯人は三人組で二人はその場で射殺、一人は逮捕されました——。

刻々と伝わる情報にテレビの前にくぎづけ

となった私は、それでも、「腹部ということだからきつと助かるに違いない」と確信のようなものはっきりと憶えました。

しかし午後五時すぎのニュースでは、ついに六十六歳の首相の死を伝えました。

——医師団は腹部の弾丸を除去したものの、心臓に達した弾丸はついにとりだせなかったと発表しました。犯人は三人の首相警護隊員でシーク教徒だった——ということでした。

あまりにも衝撃的な事件でした。つい三週間前、同じ水曜日の十月十日、私は首相にお会いしたばかりでした。私はインド政府の主催した国際仏教会議に増上寺雅楽会の仲間々を訪問していました。

その夜、ニューデリーの国立劇場シリ・フオードで私共の舞楽の演奏が「月影」の歌と共に終ると、客席最前列中央に座っておられた首相は、大きな拍手を送りながら、壇上に

のぼられ、白檀のレイを手渡されて、一人一人に「ナマステ」とやさしく声をかけられたのでした。テレビの首相の画像を見ながら、私はその時の温和な初老の婦人宰相の姿がまぶたによみがえり涙しました。

それより前、十日の午前十時すぎ、首相は国際仏教徒会議開会式にマイクの前に立たれました。場内にはビーンと張りつめた緊張感がただよいました。サリー姿は意外に小柄で、帯状の白髪が美しく、その声は澄んで若々しいという印象をまずうけました。

始めに首相は、一同に会した四十一カ国の代表団に感謝を述べられると、建国の父マハトマ・ガンジー師にふれられて、

「今のインドには仏教徒はほとんどいないと言って良いかもしれません。しかし、彼はかつて釈尊が慈悲と寛容の精神を訴えたことに強く共鳴しており、彼の言う非暴力とはまさ

にその源を一にしておりました。そして人々は彼と共に立ったのでした」

と述べられ、つづいて、今にして思えばあまりにも暗示的な発言でしたが、

「今日世界の中で、仏教徒といわれる人々のみが、同志と武器をもっていがみあうということがないことに私共は認識せざるを得ません。この機に私共は今一度仏教を大いに学ばせていただきたいと思っております」と結ばれました。

十日夜、ホテルに引揚げた私共は、ちょっと誇らしげに白檀のレイをかけインドの印象を語りあいました。そして話題は必然的に多種の宗教にも及びました。

誰もが六月のシーク教徒と軍隊との衝突を知っていました。しかしニューデリーの街に多く見かける、ターバンと立派な髭のシーク教徒はまったく平穩に映っていました。ブタ

ガヤからベナレスへ向う途中、丁度その日から始まった回教徒の祭りの為に何度となく私共のバスは立ち往生や迂回を余儀なくされました。その都度ガイド氏は、「さからえば、今度我々ヒンズーの祭りのとき仕返しされるからね」と肩をつぼめて説明しました。

首相暗殺というこのいたましい事件は、根に宗教戦争があると報道されました。確かに私共には計り知れないものが、インド人の心の奥にあるのでしょうか。今はただただ早く、平和で明るいインドのイメージをとり戻してもらいたいものと祈念するほかはありません。

十一月十一日首相の遺灰は、彼女の愛した神々の住むヒマラヤの山々にふりそそがれました。私は、今尚仏前で芳香を放つ白檀のレイに額を触れて、御冥福をお祈りさせていただきました。

連作短歌

挽歌

白秋門 佐竹隆三
さ たけ りゆう ぞう

春の陽の こともあたたき まなざしに 現実^{うつつ}に会^あはむ 術^{すべ}なし今は

ゆくりなく 熱海ホテルにて めぐりあひぬ きみひたすらに 文書^{ぶんしょ}きましし

落葉^{らくえつ}焚^たく 煙眼^{えんがん}に泌^{しみ}みて 涙^{なみだ}こらふ きみがみ生命^{いのち}は 永久^{とこ}にしずけし

何故^{なぜ}の 涙^{なみだ}か知らね 夕落葉^{ゆらくえつ} 風^{かぜ}なき園^{その}に 散^ちり急^{いそ}ぐなり

霜月しもつきの 空くもるとき 頼たのめなし 白しろき陽ひかりの象かたと きみが面影おもかげ

冬ふゆ近きき 日のゆふまぐれ 道の涯はの 遠とほき木立こだちに 風騒ふうそうぐらむ

賑にぎわしく また淋さびしくも さやぐなり 十分じふぶんの草木くさき この夕風ゆふかぜに

過とぎし日の 鎌倉山かまくらさんを 訪とひし日の 夕焼雲ゆふやけぐもの 美としかりき

天翔あまかける きみの靈魂みたまは 現身うつまの われを危あやぶみて 見守まもりたまふか

北天ほくてんの 星ほしのひとつに なぞらえて 夜々よよにし祈いのる きみ安やすかれと

（大正大学教授佐竹隆三博士は、去る十一月二十五日急逝
されました。謹しんでご冥福をお祈り申し上げます。）

《世相評談》

一年の回顧

○官約移民百年とハワイ仏教

ハワイには元年ものということがある。

元年ものというのは、明治元年という意味であるが、明治元年とは限っていない。いわゆるハワイの移民の第一世、すなわち明治のはじめの移民のことである。但しこのことばは、日本では通じないかもしれない。

その移民が、ハワイに赴いてからかぞえろと明年が百年になる。そこでいろいろの催しが計画されている。



高橋良和
たかはしりょうわ

仏教関係でもこの官約移民の百年祭記念を行うことになって、ホノルルに所在する七宗派、日蓮宗、浄土宗、曹洞宗、真言宗、真宗大谷派、本派本願寺派、天台宗が合同して、事務局をホノルルの本派本願寺の別院に設置した。

その委員会の会長は藤谷義明本願寺派総長で、ハワイ仏教連盟会長は本宗の中村良観総監、事務局長は天台宗の荒了寛師である。

そこでこの日米仏教徒会議の実践の要領として、まずその目的は、

「ハワイ日本官約移民百年祭を記念して、日米仏教徒の交流と、ハワイ乃至アメリカ仏教の興隆を図る」

ということで、ハワイ日本人官約移民百年祭記念、日米仏教徒会議ハワイ大会という名称で、事業計画をすすめている。

その事業としては――。

△日米仏教会議（一九八五年六月十七日）

シェラトンホテルにおいて開く

記念大法要（先亡者追悼、平和祈願）

記念講演、分科会、各宗代表による仏教音楽、舞踊等の交歓

△仏教文化祭（六月十三日―十七日）

各宗の代表の仏教音楽、声明、舞踊など

仏像、仏画、墨蹟などの展示、各宗僧侶の書画彫刻などの展示即売会

△日米仏教学研究発表会（七月二十七日―三十一日、アラモアナホテル）

日本アメリカの専門研究者を招き、仏典英

訳に関し、問題提起と、研究、体験などの発表

比較宗教、思想的な側面から、仏教の伝播とその変容過程に関する問題について、仏教における行の思想と形について、などの合同研究会を開く

この行事については、日本の各宗の協賛と管長、宗務総長クラスの式典への臨席、各宗の代表的法要、「行」などの公演、各大学からの関係学者の派遣、さらに記念祭の祝賀訪問団の募集などがある

この行事についての日本からの参加者は、大体五百名が予想されているということ、おそらく海外での仏教徒の行事に対して五百名の参加者を送ることは、日本仏教としても画期的なことであると思われるので、現地の大会事務局としては、是非成功させたいと力を入れているという。

ハワイの仏教は、本宗が古く、すでに九十

周年を迎えているだけに、この機会にハワイ
仏教の大きな発展の礎となるものと大きな期
待が寄せられている。

○市民と結びつく佛教大学

大学が市中の盛り場のビルに進出する。珍
しいことである。

これは京都の佛教大学が、画期的な企画
で、京都前のどまん中の三井銀行の四階の全
部のフロア一千百四十平方メートルを大学と
して使用した。大学が市民と直結するという
今後の大学の在り方を示す一つの試みがなさ
れ、この十一月一日にオープンした。

このビルは、四条烏丸というから市内のオ
フィスや銀行街の目抜き地である。三井銀
行の建物は、京都における洋館でも古いもの
であり、それが新築されるについて佛大と契
約し、四階の全部を、佛大が使用する。

ここでは市民を対象とする主として仏教を
中心とする公開講座や文化講座、講演会、そ

れに心理のクリニクも開く。

ともかくも、大学が市民と結びつくという
ことで、一般からはその関心が深く、今後ど
のように成果をあげるか、それが期待されて
いる。

○各宗の檀信の信仰運動

門徒講運動、同朋運動、おかげさま運動、
一隅運動、おてつき運動と名前は異なるが、
その主旨は、いづれも各宗の本山、及び宗派
が戦後行っている檀信徒の再組織運動であ
る。

門徒講運動は、本派本願寺、同朋運動は、
東本願寺、おかげさま運動は、臨済宗妙心寺
派、一隅運動は、天台宗、おてつき運動は、
浄土宗総本山知恩院ということになる。

どの運動も、すでに十数年の歴史をもつて
いる。そして機関誌を発行して会員に呼びか
けているが、然し十数年の歴史の割合に、進
歩が少ない。いわゆる横這いであるといえる

のではないか。

いわゆるマンネリでの域を越えないのである。一隅運動以外は、それぞれ奉仕団の地方の寺院が組織して入浴し、本山に一泊して宗務の廟や、本山の清掃奉仕をしてかえっていか、この体験を通した信徒の組織は、まことに実績があがっているように思う。

然し一千万という門徒をもっている東西本願寺、五百万という檀徒をもっている浄土宗の運動として、十万人や、二十万人の会員でその後どんなに効果をあげているか、まことに淋しいことである。

既成仏教の新運動は、まるで無人島の花火のようで、実に反響が少ないということにおどろくのである。

なにもここで新宗教と比較するほどの考えはないが、それでも新宗教の人集めや、会員獲得のうまさ、やはり他山の石として考える必要があるのではないか。

甲子園球場に五万人の会員を集めた一大デ

モンストレーションをある新宗教はやった。そんなことは、仏教各宗ではまるで夢のようなことであるが、それをそのままやれというのではない。いわゆるその動員力というものについて既成教団は、大いに参考にすべきことである。

ここまでの檀信徒運動が、一つの壁にあたってその後発展しないのは、如何なるわけがあるのか、今の会員数だけで満足することなく、今後の発展計画があるのか、どうかこれが今当面している問題であるといえる。

問題は、個々の寺院の在り方である。葬式と法事に追われて新しい運動には目をむける暇がないとは言えないので、教団や、寺院が百年の大計をもって今はつらくても前進をして向かわないと、将来に大きな反省が残ることになるように思う。

○日中友好の問題

中国仏教と交流。しかし中国には檀信徒を

もっている寺が、ないかもしれぬ。でも各宗との関係深い寺々では、数多くの僧侶が寺を守っていることは、訪中した各宗の代表から聞いている。

幸いにも中国仏教協会の趙璞初会長が健在で、今まで各宗との交流は、かなり成果をあげている。

今夏も天台宗の山田恵諦座主の傘寿の祝賀会が、中国の五台山で行ったことがあり、山田座主を迎えて中国の僧侶が多数参加したようであった。

各宗の交流もどんどんすすめられて、本宗では、西安郊外の神禾原に香積寺の本堂が建設されて、善導大師の顕彰がなされたし、臨済、黄檗宗の両宗では、臨済塔の修理が、完成して成果をあげている。

黄檗宗では、福建省の古黄檗といわれる黄檗山を訪問して交流を深めているし、真言宗では、弘法大師の遺跡である西安の少林寺に立派な本堂を建てている。

日中友好の成果は、どんどんあがっているが、さてこれからの日中友好は、どのようなかたちでなされるべきか、それが注目される。ところが一方の中華民国といわれる台湾の仏教も、まことに盛んである。特に台湾では檀信徒も多く、それに尼僧が非常に多い。ここも仏教国であるが、中華人民共和国の仏教との交流をやると、台湾とは交流が出来ない。

あちらが立てば、こちらが立たず、両国が存在しているのであるから、日本の仏教は、今日どのようにして交流するか、まことにむづかしい問題である。

たとえば、台湾の仏教僧侶などを我が国に迎えて勉強させてやりたい。まして台湾は、国が貧乏であるから、海外への留学がむづかしいようである。

台湾にある仏教徒と、どのように交流するか、それが今後の問題点と思うが、政治でもむづかしいのであるから、まして宗教団体としては、頭の痛い問題であらう。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』十二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵が、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

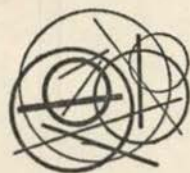
(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋二―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

エ
ッ
セ
イ

セントルイスの夏(二)

—市内点描—



朝、早く目覚めた。昨夜久し振りに早寝したせいか、気分は爽やかである。カーテンを開けると、窓いっぱい朝暁の空が拡がっており、ゲイトウェイ・アーチのシルエットが

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

くっきりとその空に嵌め込まれている。まだ明けきらず、街もミシシッピの流れも鉄錆色の薄靄の中に沈んで、僅かに行き交う自動車のライトだけが生きている感じである。

ベランダに椅子を持ち出して、ゆっくりと煙草を吸う。朝のこのひととき、家族が起きてくるまでの極く限られた短い時間が、私に与えられた唯一の自由な時間なのである。

アメリカ合衆国は、数年前に建国二百年祭を祝った若い国ではあるが、いまの版図を得るまでには、この広大な土地は少なくとも二度、二分三分される危機を迎えているのである。

一八〇三年、フランスからルイジアナを買収するまで、アメリカの領土は大西洋岸の十三州と、テネシー、ケンタッキーの二州が増えただけで、ミシシッピー河の東岸までとなっていた。西部の未知なる土地に目を向けたジェファースン大統領は、かなり焦っていた。というのは、太平洋岸をロシアが南下の気配を示していたし、スペインは南米から中米、さらに北米へと着々とその版図を拡げて

いたからである。北米大陸は、イギリス、フランス、スペイン、ロシアというヨーロッパの列強の切り取り勝手に任されていた。ルイジアナなどは、フランスからスペインへ、スペインからフランスへ、そしてアメリカへと統治国が替っている。原住民の意志を全く無視した、これはまるで態のいい土地転がしである。もしフランスが植民地政策を強力に推進していたとすれば、北米大陸は東部はアメリカ、中部はフランス、西部はスペインに分かれていたかも知れない。スペインは手を拡げすぎて、後にメキシコに独立されて、北米大陸から撤退を余儀なくされたが……。フランスの植民地政策の変更がアメリカに幸いし、棚ボタ式にルイジアナを掌中にする、ジェファースンはルイスとクラークという元軍人に命じて探險隊を組織させ、太平洋岸への道を探らせた。しかし、この探險隊は遮二無二西へ西へと向ったわけではなく、インディアンの実態、動植物の生態、各地の天候等

を逐一調査するよう指示されており、多分に
學術探險隊の性格を兼ね備えていた。とりわ
けジェファースンは、インディアンとの共存
を願っていたから、当時の金で、二〇〇〇ド
ル相当の贈物を持参させているのである。

生活物資を種々雑多な人間の集散地として
繁栄のきざしを見せ始めたセントルイスは、
探險隊にとって格好のオアシスとなり、以後
大西部への出入口として発展した。一八〇四
年五月十四日、探險隊はセントルイスを出発
し、途中幾度となく生命の危険に曝されたが
ら、一八〇五年十二月三日、遂に縹渺と拡が
る太平洋を目の当りにしたのである。

第二の危機は、それから約六十年後の一八
六一年に勃発した。アメリカ合衆国を南北に
二分した南北戦争がそれである。奴隷解放を
旗印とする商工業圏の北部諸州と、奴隷制度
の存続に固執する農業圏の南部諸州の戦闘は
一進一退を繰り返したが、六十五年南軍の全
面降伏で五年にわたる内乱は終熄し、合衆国

の統一は維持され、奴隷解放も達成されたの
である。しかしこの時、もし北部から離脱し
た南部が勝っていたとすれば、当然分裂はま
ぬがれず、いまのアメリカはなかったと考え
られる。

鉄錆色の霧の中から太陽が頭を覗かせた。
一条の光が、サッとミシシッピの河面を走
る。霧に遮られて、朝日は真紅とは言い難い
が、日中の暑さを予感させるに充分な柿色に
輝いていた。

「お早ようございます」

女房と娘が起きて来た。

「なにしたらっちゃったの?」

「ごらんの通り、煙草を吸い、景色を堪能し
ながら、アメリカの歴史を考えていた」

「……」

「ところで、今日のスケジュールは決ったの
か?」

「ええ。十時半バスターミナル発の観光バスで市内見物に行きます。コースは五つばかりあるけど、最終的にこれに決めました」

と娘が言った。

「お父ちゃまの喜びそうなところにも寄りますから」

「バドワイザーのビール工場か?」

「なんだ、知ってたの」

「たいして期待はしてないよ。日本の工場の方が、ずっと設備は整っているはずだ。まあ試飲ぐらいさせてくれるだろうが……」

私がニヤリと笑うと、娘はうんざりしたような顔をした。

「午後は遊覧船に乗りますからね」

朝食を済ませてから、娘と街へ出た。バスが出るまでの時間稼ぎだから、そう遠くへは行けない。旧寺院、旧郡庁を外から見えて歩く。なかなか立派な建物である。いずれも十九世紀半ばに建てられたもので、現在内部はインディアンや西部進出に関する展示品を陳

列した博物館になっているそうであるが、時間が早すぎて、まだ開館していなかった。

到るところで古いビルの解体作業が行われている。すでに作業が終った一郭では、新しいビルの建設が急ピッチで進んでいる。活気があるのはこの作業場ぐらいのもので、街全体は妙に沈んでいる。西部開拓の拠点として繁栄したセストルイス、一九〇四年に万国博覧会を開いたセントルイス、一九二七年、リンドバーグの大西洋横断を支援したセントルイスの心意気はどこへ行ってしまったのだろう。もはや機能しなくなって壊されて行く建物は、過去の栄光の象徴かも知れないと思っただ。あと十年もすると、セントルイスは面目を一新した街に生まれ変わっているに違いないが、古い物も少しは残しておいてもらいたいと思うのは、旅行者の身勝手な感傷であろうか。

目抜き通りから一ブロックか二ブロック横丁へ紛れ込むと、スラム化した古いビルの家

並が続いている。やがては取り壊される運命にあるのであろうが、人影は少なく、ひょっこりと黒人の少年が現れて、ジロツと一瞥をくれて通りすぎて行ったりする。あまり居心地のいいところではないので、早々に引き返す。スラム街のはずれに、「セントルイスで最古の本屋」という看板を掲げた店があったので覗いてみた。一言で言えば古本屋で、入口にうず高くコミック雑誌が積み上げられているのは、日本の古本屋と全く同じである。古本独特の匂いが店全体にしみ込んでいて、雑然と書棚に押し込まれた本の一冊一冊にまつわるドラマを思うと、その迫力に圧倒される思いがした。

「あら、もう十時よ。ママやきもきしてるんじゃないかしら」

街角のデジタル時計を見て、娘が言った。

「まだ三十分あるが、少し急ぐか」

と言って、私は足を止めた。「マークトゥエイン銀行」という建物を認めたからであ

る。

「あれ、一枚撮っておいてくれ」

娘は怪訝な顔をした。

「創始者の名前をつけた銀行は各国にあるが、全く縁のない人の、それもペンネームを銀行名にするなんて、アメリカにもしやれた人がいたんだなあ。さすが、セントルイスってとこかな」

「マークトゥエインの本名は、確かサミュエル・クレメンツ」

「一八三五年に生まれ、一九一〇年に亡くなっている」

日射しは強いが、ビルの陰を拾って行くと、風が通るので意外に涼しい。バスターミナルには、不機嫌な顔をした女房が待っていた。

「遅かったわね。間に合わないかと思ったわよ」

観光バスは珍しく定時に発車した。どこをどう走っているのかさっぱり判らないが、貴

方任せて気は楽である。ゴシック建築群を左に見て進む。

「慶応の図書館そっくり」

と、娘に指摘されるまでもなく、それらをカメラに収める。フランスの統治が長かったせいか、建物は総てフランス的で、スペインの影響は全く見られない。もっともこの辺りがスペイン領だったのは、一七六九年から十一年間にすぎなかったのだから、何も出来なかったであろうが……。

ほどなく大聖堂に到着。これはまた息を呑むようなビザンチン様式の大建築である。壁面といわず、ドームの天井といわず、びっしりと宗教画で覆われている。絵の一つ一つに故事来歴があるのであるが、ただ呆然と眺めるだけである。祭壇の前ではミサが行われていた。娘がお葬式のようなと言うので、撮影は差し控えた。

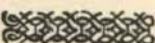
バスは動物園、ジュエル・ボックスという温室を巡って、順次見物客を降ろして先へ進

む。私たちは二つとも敬遠した。この暑いのに動物園や温室見物でもあるまいと思ったからである。コースの最後は、パドワイザーのビール工場であった。大規模な工場だが、日本の近代工場を知っている私には、前近代の工場の感はある。なぜか厩舎があって、体格のよい尻尾の短い馬が飼われていた。クライズデイル種というスコットランド原産の馬で、何代か前までは荷役に従事していたとか。フォスターの名曲「草競馬」にあるが、尻尾の短い馬とはこれかと、初めて納得がいった。これがビール工場での唯一の収穫だったと言っているだろう。

午後一時すぎホテルに帰る。遊覧船は二時四十五分の出航である。早速バスに飛び込み、シャワーを浴びる。とにかく、暑い!!

(続)

浄土句集



一田牛畝選



老患の朝顔鉢持ち入院す
福岡 原 敬二郎

評 入院することになった。育てていた鉢の朝顔は蕾を持っている。その朝顔鉢を持って行って朝々を楽しさんと願う患者の心は明るい。

殉教史悲し勇まし虫の声
熊本 山崎 石庭

評 天草や島原の切支丹殉教史は悲しく勇しいが、天草の島々で聞く虫の音はそのことを物語っているようで胸打たるものがある。

紅こぼし雫をこぼし萩の雨
東京 真野よし子

評 雨が静かに降っているのである。紅萩は紅をこぼしている。水雫はしとしと落ちていく。実に心やすらぐ静かな景色である。

ピルの窓四角の秋がのぞきおり
山形 松田 光誉

評 ピルの夜の窓は四角に灯っているが、昼は、その窓に秋の日射が爽やかにのぞいているようで、まことに心持ちよいものである。

亡き母の残せしごとく盆用意
福岡 服部 光代

評 姑の心配は、死んだ後嫁が法事や墓詣りをしてくれるや否やであるが、心配は無用で姑のせし如くしてくれることは確かである。しかし、先祖祭のことは、よく観察させて置くことが、まずは肝要である。

足許に落ちし風の日赤い羽子
東京 小笠原香祥

評 胸に差した赤い羽子が風に吹かれて足許に落ちた。気付かなかったら踏んだであらうに、拾い取って、落ちないようにしっかりと差している姿は微笑ましい。

酌むもよし秋刀魚の苦さことに佳し
福岡 行正 明弘

評 秋刀魚のはらわたは苦いのである。この苦味を好むのが秋刀魚通であるらしい。これで盃を重ねる秋の夜長は楽しいことならん。

東京 栗原やえ子

群馬 島津 か寿

福岡 櫛藤みきを

天光院四百年の天高し

登り来し苑錦木の燃えてをり

友と酌む古酒うまかりし飛驒の秋

山形 松田 允子

福島 秋葉 淳

長野 友刈旋風子

少年の口笛軽し秋日和

曼珠沙華みちのく新幹線迅し

秋桜土手より湖に連らなれる

熊本 山崎 松子

東京 猪瀬 幸子

大分 丹羽 雛中

おしなべて海女は声太墓参り

白妙の梅の如く萩散りぬ

阿蘇土産吾亦紅をも供華として

福岡 上滝津弥音

東京 吉原登起子

福岡 前田 秀峰

霊祭好きな酒添え御霊膳

親子連れ水辺に遊ぶ秋日和

嫁姑敬老の日に孫連れて

福岡 荒牧 還愚

東京 末常てる子

福岡 山崎 鬼川

敬老日孫の仮名書祝い文

彼岸花線路に浴ふて咲いてをり

木の実雨露坐の仏の膝叩く

山口 上野 明達

神奈川 鈴木美智子

福岡 安藤平次郎

放水の虹をバツクに黒部ダム

温泉がへりの旧街道や烏瓜

見せ小屋に子の目が魅入る放生会

東京 吉田ゆきあ

千葉 須田 牧草

福岡 釈迦野はねん

鎧冑を好みし夫の栗御飯

塔内の暗きを出でて曼珠沙華

コスモスの倒れしままに咲いてをり

熊本 山崎遣迎子

福岡 荒牧 亀齡

一年の過去帳清記師走かな 一田 牛畝

御法語を掲ぐ高札萩の寺

敬老の首の友に缶ビール

『法然上人文状』の覚書

—阿弥陀護摩一七箇日支度事—



石いし 畠はたけ 俊しゅん 徳とく

(大津市浄光寺住職)

一 はじめに

もう四十年程も前のことになりました。どうか、清水寺の大西良慶貫主様の許へ、京大医院の小笠原登先生のお使いで参りました時に、おねだりして頂きました色紙の一葉に、『白雲堆裏、不見白雲』と書いて下さいました。申すまでもなくこれは私への御教訓でありましたが、今それ移して考えますと、千年の都に幾世代も永く住居し、四六時中、文化財の中に、どっぷりと漬って居りますと、返って、その一点一物への感激が

弱い、というような場合もある、と言えるのでは……。古筆鑑定家の祖と称されます、常沢弥四郎（のち古筆了佐）は、京洛の生れではなくて奇しくも近江の人でありましたという事も、何かうなづかれるような気が致します。

地方から京都へ出て参りますと、目に触れるものは、何れもかけがえのない貴重なもの、極めて由緒深げなものばかりに感ぜられます。

そしてそのような心持で居りますと、まだまだ古社寺の宝庫に、旧家の宝蔵に、さては書画骨董古書籍

店、縁日の露店の片隅にも、ひっそりと眠っている
「古くて感じのよいもの」に巡り会えるのも京都のよ
さでしょうか。

表題の『法然上人文状』も、元はと言えば戦前から
折に触れて、京都の古本屋の店先で集めて居りまし
た、美術倶楽部の売立の所謂『目録』（『もくろく』『装
九路久』『茂久呂玖』『毛久呂具』）が三十冊程にもなった
でしょうか。その中から、戦後のつれづれに、整理し
て居りました際に、ふと見出しましたのです。爾来、
種々心当りを調べて参ります程に、又諸先生方の御示
教を仰ぎます程に、貴重な資料であることに、驚きと
喜びを感じて居ります。唯、残念なことに、その原本
が大正六年の入札で、旧蔵者の手を離れましてからの
行方が、全く判明致しません事です。その探求の資に
もと、自らも集め、又数々の御示教を頂きました、覚
書を寄せました。

二 本文とその解説

この『法然上人文状』は、
第三回赤星家所蔵品入札

下見 十月 十三日 午前九時ヨリ
入札并ニ開札 十四日 午後四時マデ
十月十五日

場所 東京両国美術倶楽部

札元

東京	山澄	力藏	同	中村作次郎
同	梅沢	安藏	同	川部 利吉
同	宗	与	同	多門 店
京都	林	新助	同	服部七兵衛
同	土橋嘉兵衛		大阪	戸田 弥七
同	山中吉郎兵衛	同	山中	与七
同	春海	敏		

にて行われた時の『目録』に掲載されました計八百六
点の中、写真の掲載されしもの二百点、その中の三十
八頁に掲載。即ち、

『三三 法然上人文状』

本紙 縦九寸六分 巾一尺五寸七分

表装 一文字風帯紫地印金

〔註〕 印金とは、絹などに、漆と糊とで、紋を押し、上に
金箔を置いたものをいう

とあります。

◎本文の解説

注進 阿弥陀護摩一七箇日支度事

合

類 口、
五宝 金、銀、瑠璃、琥珀、
赤珠、
五香 沈、白檀、丁子、鬱金、竜腦、
五藥 遠志、
人蔘、
訶梨勒、
檳榔子、
牛黄、
五穀 稻穀、大麦、小麦、大豆、小豆、
壇供米五石四升、
御明油、
一斗五合、
壇 一面、
脇机、
二前、
燈台 四本、
礼盤、
一脚、
有半疊、
壇敷布一端、
供物蓋、
新布二丈、
大幔 一帖、
燭桶、
一口、
閼伽桶 一口在杓、
折敷、
二枚、
阿闍梨 承仕、
一人、
駝仕 一人、
見丁、
一人、
赤色、
承仕、
駝仕、
見丁、
淨衣 一領阿闍梨料布二段、
等用

右注進如件

承安二年十月十五日 天台沙門源空記之

三 御示教の数々

○其の一

昭和二十三年の初秋、この『法然上人文状』を発見致しますと、いささかの法縁に甘え、直ぐに大正大学の
大野法道先生に、写真版を添えて郵送しお教えを乞
いましたところ、次のような御示教を賜りました。

十月五日出の貴翰たしかに拝受致しました。御郵
送の『法然上人文状』なるものは上人のものとして
は始めて見ました珍しい物です。承安四年と云え
ば、浄土開宗の前年ですから、此時は叡山僧であつ
たので、護摩行為を為されたと思われませんが、「阿弥
陀護摩」とあるから、既に浄土信仰に傾いて居られ
た事と思います。然し次ぎの点からは疑わしくもあ
ります。

一、法然上人には、此種の行事を自署までして書か
れた物は他に例のない事。

二、法然上人伝に依れば、開宗の可なり以前^{不詳}から、既に浄土宗信仰を自ら思定めて居られたが、社会的に宣言するを差控えられ、漸く承安五年春に至って、開宗を宣言された。(四年頃には最早、浄土宗の念仏と行事を修行されて居り、天台行事は為されなかったらしい。)

右の次第で、何れとも決し難く思いますが、珍らしい事は確かですから、参考として、此物を知って置くは必要と思います。(以下私信につき略す)

(十一月廿七日付)

○其の二

其の後二十五年間程、温存して居りましたが今一度他の角度からの御教示を仰ぎたく、開宗八百年慶讃法要が一宗を挙げて奉修されるを機に、佛教大学の三田全信博士に同じように写真を添えて郵送申上げ、お教えを願ひ出しました処、早速御懇書を拝受致しました。

その御厚情を、いつまでも伝えたく、ほぼ原文のまま、次に転載させて頂きます。

前略、阿弥陀護摩支度の文献、種々に考えられる

でしようけれど、法然上人の真蹟のような気がします。阿弥陀護摩は密教の滅罪の修法と言いますから尚更の事です。

法然上人は如法経にしろ、懺法にしろ、突込んで研究されておることが、此等の文献で知られますので否定するより、寧ろ肯定したいところです。此種のものがないければ不思議な位です。

難を言えば、現存の経路が明らかでない点が惜しいです。若し判っていたら、国宝級で、誰も黙してはいないでしょう。

法然上人自身も、一切経に、また古代のもので書物にないものは、写し取っておいたと仰言っていますから、或はこのような記録も残されていたのではないのでしょうか。

○其の三(重ねて三田博士より)

前略、間もなく佛大から、「法然上人開宗八百年記念号」が出る筈で、その論文に「持戒と念仏について」執筆しました中に貴氏のこの史料を紹介しておきました。

現存と否にかかわらず、その当時であったということ、上人が阿弥陀仏に関する修行を行ったり、不断に研究されていたことが考えられる、有力な史料と思われる。

その当時は恐らく法然上人が、このような他宗の修法などされる筈がないと思われていたから、誰にも手に触れようとはしなかったのではないでしょうか。今日のような文化史的研究が進んで来ると、貴重な史料が不明になるのは惜しいことです。

○其の四

『法然上人文状』―注進阿弥陀護摩一七箇日支度事―の本文の読解には、最初大変判読に苦労しました。五宝・五香・五葉・五穀等に就いては、一応仏教辞典によって調べて置いてその予備知識を基にして判読致しましたが、調度品の名などになりますと、その法要に列した事のない私には想像も見当もつきません。幸い例年、立木山の節分の護摩供を主宰なさいます御縁で瀬田の青嶠寺の川合藏明師に、お尋ね致しました処、天台宗の宗学研究所の西村岡紹先生を御紹介下され、

その御示教を仰ぎまして、漸く前掲の程度にまで判読することが出来ました次第です。記して御芳情を拝謝申し上げます。

尚、昭和五十三年五月二十日の叡山文化研究会の席上、「阿弥陀護摩と天台沙門源空」と題して、右文状を紹介下されました由、後日、御報告を頂きました。

〔附〕右文状の年号に就きましては、初め、承安二年の干支が壬辰に当りますとの考えが先入主となり、二千年と読んで居りましたが、よく拝見しますと、二二年即ち四を二二と割り書きなされていることに気づきました。当時の習わしで、四と死と音通なので忌む風習を、法然上人も、浮世の習いと受け入れなされたものかと存じます。十月十五日に修せられました事は、本尊阿弥陀仏の成等正覚の聖日なのに因んでの事かと拝察されます。

四 法然上人の真筆

浄土宗の宗祖法然上人の真筆として、今日まで伝えられているものは、各宗の祖師方に比べて、極めて少なく、次の六点が挙げられるのみです。

① 選択本願念仏集 京都寺町盧山寺藏

この集の内題他二十一字のみ真筆

② 七簡条起請文 嵯峨二尊院藏

年月日の下の署名と花押のみ真筆

③ 一行一筆阿弥陀經 大阪一心寺藏

その中百十行目の一行二十一字が上人の真筆

④ 正行房への御返事 奈良興善寺藏

法然上人の筆蹟鑑定上、画朝の基準となったもの

⑤ 武藏国熊谷入道殿御返事 嵯峨清涼寺藏

所謂興善寺文書と筆蹟が完全に一致、重文指定となる。

なる。

⑥ 一枚起請文 黒谷金戒光明寺藏

法然上人御往生の二日前、臨末の御絶筆

五 阿弥陀護摩について

『古今著聞集』二には、

「承安二年三月十五日、六波羅太政入道（平清盛公）福原にて持経者（経文を常に読誦して修行する人）千僧にて、法華経を転読することありけり。（中略）浜に飯屋を作て、道場にはせられたり。仏は一千体ぞお

はしましける。又四十八壇の阿弥陀護摩も有けり」

（二、釈数五九）

と伝えています。

また『栄華物語』にも、

「ある所を見れば、曼荼羅を懸け奉りて、阿弥陀の護摩、尊勝の護摩など行ふ」

と伝え、上流階級にとつては、重要な行法の一つであった事が解るのであります。

四十八壇の阿弥陀護摩とは、密教で阿弥陀如来を本尊として、護摩を焚き、息災や延命などを祈禱する行法で、四十八の護摩壇（又は沢山の壇）を設けるをいう、と。

六 赤星家の入札

最近入手の、光芸出版編『骨董価値考』によれば、大正六年は、入札会三尊と現在でも語り草になっている入札が相つぎました。秋元子爵家（旧上州館林藩主）、赤星家、佐竹家の入札です。五月の秋元家に引続いて、六月に行なわれたのが赤星家の入札です。赤星家は同年十月に二回、合計三回の入札を行ない、総売上

は五百拾万円に達しました。これを金相場の指数で換算すると、現在の三十八億六千万円に相当します。いかに空前のスケールだったかが想像されましよう。

赤星家の入札は、遺族の手で行なわれたものであります。道具界の罇竜として著名な弥之助氏（実業家磯長孫四郎の子、赤星家に養わる）は鹿兒島出身で、西郷従道、横山資紀などの海軍の大物と特別関係が深い政商の一人でした。軍艦の大砲据え付け法を工夫して特許をとり、これを日本の軍艦の発注先である英国の造船会社に売込み、莫大なりべートを受けた軍艦成金でありました。豊富な資力にものをいわせ、天下の名器を悉く吞み込み、晩年は名物茶入を二十八も所持した事を誇って、当時日本屈指の大蒐集家でありました。

第一回入札の重なるもの数点を例示すれば、

梁楷筆 雪中山水図

二一〇、〇〇〇円

東山御物 玉潤筆 蘭図

八七、八〇〇円

巨勢金岡筆 那智滝図

八五、六〇〇円

弘法大師筆 金剛般若経開題

六三、一八八円

元信筆 豊千禪師寒山拾得双幅

五六、〇〇〇円

とあり、これを金相場の指数で換算しますと、七七〇

倍位に当るわけです。（何れも現在重文、国宝）

赤星家の入札は、蔵品の優れていたことと同時に、一般の入札と異なる特別な理由が話題を呼びました。その趣意書によれば、次のようでした。

——自分（遺族代表鉄馬氏）が今回所蔵の道具類を売却すべく決心したのは他でもない。亡父弥之助は在世中、道具の取扱を厳重にし、老母の外には殆んど何人にも手を触れしめず、老母も度々叱責せられて非常に苦心せられたが、父の歿後も殆んど自身一手にて取扱い、亡夫の生前から道具係であった、八十歳許りの老僕一人を相手として、多数の道具を虫干するなど容易ならぬ骨折であるから、拙者はこれを見るに忍びず、拙妻をして手助けを為さしめんとせしに、嫁にかかる煩雑なる仕事を課するは、我が心にあらずとて、老母は容易に聞き入れない。今や何とかしてこの問題を解決せざるべからざるに至りたるが、自分は道具につき何等の趣味もなく、唯だわずかに刀剣を愛好するのみであるが、その刀剣について思い合はざるものは、心なきものが、刀剣を取扱う乱暴さは、往々拙者らの胆を冷すことがある。道具を愛好するものより見れば、

蓋し同様の感があるであろう。されば刀剣なり道具なりは、兎角数寄者でなくては、完全な保護は為し得ないものであるから、自分は他日道具好きとなつたらば、その時改めて買入るべく、今日の状態では、長く母の手を煩わすは子として甚だ忍びざるところであるから、今回断然これを売却することに決心した——（着藤利助著『書画骨董五十年』）

赤星弥之助の嗣子鉄馬は当時三十歳台で、朝鮮で農場経営をし、朝鮮に在住していました。従来の入札は没落した家が経済的理由で行ない、湿っぽい印象が強く、その点で赤星家の入札は、じめじめしたものを払拭した、カラッとした印象を世間に与えました。

大正六年十一月には、旧秋田藩主佐竹侯爵家の入札は東京美術倶楽部で行なわれました。

七 結 び

昭和二十三年の秋の『目録』の中に、この『法然上人文状』の写真を発見致しました時の感激は、今も忘れる事が出来ません。

次に、当初赤星家について、全く知る処が無く、

ただ何か手がかりはないかと、心にかけて居りました。図らずも、明治三十九年四月発行という、表紙も破れた『宗教界』という月刊紙の第貳卷第四号を披見して居りました時に、小杉樞邸氏が「本邦の書道に於ての弘法大師」という一文を寄稿されて居りました。

『金剛般若経開題』というものの草稿、多く草体に書かれたる一卷あり。今は断片となりて、有栖川王府に一片数枚あり、東京麻生鳥居坂町赤星氏に一片数枚あり、余もその残簡一枚を珍藏す。実にその真率なる筆意、これら所謂大師の大師たる真面目にして、観るごとに、その神韻を覚えて、いと尊し。云云」

この文中に、初めて赤星家の片鱗、手掛りを得ました時の喜びも懐しい思い出です。

次に、平凡社の『大辞典』にもしかるすと出ているのではないかと、「アカボシシ」の項を披いて見ましたところ、次のような記述がありました。

「赤星氏は、藤原氏、菊池の支族、肥後国菊池、郡赤星の地名に負ふ。鎌倉時代に著はる。」

とあり、その出自を知り得ました。次の項には、

「赤星弥之助、実業家。磯長孫四郎の子。赤星家に養はる。鹿児島の人、東京にて金貸業等を営む。明治卅七年歿、年五十三。」

とありました。次いで、アサヒグラフ別冊、一九七八年秋、美術特集『安田靉彦』の作品の中に、これ又思いがけず、『赤星母堂像』に对面致した時は、どれ程の年月であったかは知らないが、『法然上人文状』を護持し、虫蠟の害からお守りをして下さった人だと思ふ時、親しさ懐しさをさえ覚えしました。と同時に、何故虫干の折にでも、宿坊なり本山に一言声を掛けて下さらなかったのか、と残念でなりません。『赤星母堂』とは弥之助氏の妻室、鉄馬氏の母堂に当る。

次に、始め私の手にしました第三回売立の目録には年号が入って居りませんでしたので、これには悩みました。処が今出川寺町西入藤原北御所書房より「古書即売目録」が郵送されて来て、その中に『第二回赤星家所藏品売立目録』を見出し、注文入手致しました処、この目録には入場券が切り取られずにありまして、それに『大正六年』の年号が入っていたのです。文字通り雀躍して喜びました。

解ったのです。この『法然上人文状』が、大正六年十月十三日と十四日には、東京両国の美術倶楽部の会場に、正しく原本が出陳されていたことが確認されたからです。

今一つ最近と申ししましても、昭和五十一年一月、毎日新聞社発行の『仏教芸術』一〇五号の口絵写真に、『重源家地相傳状』として掲載され、奈良吉田氏蔵との添書が附されて居ります。よく見ればこれはかつて赤星家の第三回入札の時の目録に、『法然上人文状』『北条政子文』『北条時頼消息』等と共に、写真版が掲載されて居りました「三一 俊乗坊文状」―相傳領地貳戸主事―と全く同一のものでありました。無事だったのです。

大正六年十月十五日に、旧蔵者赤星家の手を離れてから、特に大正十二年九月一日の関東地方の大震災、そして今次の戦時中の大空襲による戦火の下をくぐりぬけて、『俊乗坊文状』が現に奈良の吉田氏の手に無事である事で、『法然上人文状』の上にも、一縷の望みが掛けられるようになりました。どうか一日も早く、原本の所在が判明致しますようにと念じつつ、覚書のペンを握きます。

立ち止まるな善導

〈6〉

寺内大吉

挿絵・松濤達文

前章・絶唱の経典 (六)

十六

阿難系の経典を探索せよ、と師のタバス尊者は示唆してくれた。しかし、このパミール高原の深い山中で、そんなものを入手する望みは全くない。少年サビヤに可能な唯一つの方法は、大崖仏塔の指導者マトナ阿闍梨の該

博な知識に頼るだけである。

朝の礼拝のあと、サビヤは阿闍梨をその窟房へ訪ねてみた。

「朱駒波の城内から、また何か言ってきたか」

マトナ師の関心は先日サビヤが報告した内容に集中しているらしい。

「いいえ、今日は少し阿難尊者のことをうか



がっておきたいと思つてまいりました」

「阿難尊者だど？」

マトナ師の眼がけわしく光つて。

「阿難尊者とは、どういふお方だったのですか」

「二十五年間、釈尊のお傍に随侍して多聞第一と呼ばれた十大弟子の一人だ。しかし性格は女々しい点が最後までぬぐわれなかったようだな。釈尊が亡くなったあと一時、邪教徒の群れへ身を投じている」

「仏教を捨てたのですか」

「捨てた、とみんなから誤解を受けたらしいな」

「釈尊が亡くなられたあと、身の毛もよだつようなことが起つた、と『長老偈』で書いていますが、それはどういふ意味なのでしょう」

「サビヤよ、誰かに教えられたな。誰であるかは問うまい。いまの字句の意味だが、表面は釈尊が息を引き取られた直後、沙羅双樹林

に暴風が吹き荒れ、雷鳴がとどろいた、といふだけのことだ……しかし、私はそれだけではないと思つてゐる」

そこでマトナ師は立ち上がると、石棚の奥から数葉の樹皮を取り出してきた。びっしりと文字が書きつらねてある。

「経典ですか」

「パーリ語で書かれた大バリニッパーナ經という。釈尊の涅槃を詳述したものだ」

「大般涅槃經で……」

「最後に阿闍世王が現れるあの大般涅槃經ではない。あれはカシミールあたりに伝えられたもので、こちらはインドの南方で伝承した経典だ」

マトナ師もサビヤが朱駒波城内で拾ひ読みした「大般涅槃經」は知りつくしていたようである。

後世になつてそれは「北伝」と呼ばれ、いま見せられたパーリ語の経典は「南伝・大般涅槃經」と漢訳された。釈尊が、マガダ国霊

鷲山の竹林精舎を立ち出でて、ガンジス河添いに北上してゆき、遂にクシナーラーの沙羅双樹林で涅槃へ入るまでを克明に叙述している。

「どうだ、読みたいか」

しげしげと眺め入る少年を、マトナ師はやや嗜虐的な視線でなぶりまわした。

「是非……」

「よろしい。では毎朝この刻限を講義に割いてやろう。その分だけでもお前がどこかの洞窟で妙な勉強をして来ないで済むからな」

マトナ師は、サビヤの秘密を知っており、また仏塔へ帰着しながら蹈晦し続けるタバス尊者へ強い反感を寄せているにちがいない。

「南伝」が冒頭でヴァッジ人の会議制を釈尊が支持して阿闍世王の独裁権力を批判したことは、前でふれた。このあと釈尊は竹林精舎の弟子たちに教団の未来に関して七カ条の訓戒を与える。独裁者を排し、すべてを衆議で決定することこそ永遠へつながる道だ、と

教える。そして旅立つのである。

「つまり釈尊のこの旅立ちはだな、明らかに死を予知しての行動だったと推量できる」

とマトナ師は注釈した。

随行したのは阿難ただ一人だったようである。

旅の目的地は何処であったか。ガンジス河添いに北上していったのである。阿難は言うまでもなく釈尊の従弟にあたる。また途中で加わってきたらしい阿那律（アヌルッダ）も同じ釈迦族の出身である。ガンジス河を北行してゆくと、やがて現ネパールの山裾になるカピラ城やルンビニーの園に至る。釈迦族の版図、釈尊の故郷である。

「つまり釈尊は故郷の地へ帰って涅槃へ入ろうとしたと思われる。また阿難にしてみれば、先に隣国コーサラの悪生太子に蹂躪し尽された釈迦族を釈尊の帰郷で再興したい意図があったのではないか。だが、それが裏目と出たように私には思われてならない」

マトナ師は推理の先端を覗かせただけで、その日の講義を終えた。サビヤはそこまでの分を筆写するために樹皮一枚を借り受けて、窟房を辞去した。

同じ日の午後、前ぶれもなく沙門竜猛が大崖仏塔へ現れた。マトナ師と長時間にわたって窟房が密談して引揚げていった。

翌朝、サビヤが講義を受けにゆくと、マトナ師はまず昨日の経緯を告げた。朱駒波城内における駱駝夫人の身に危険が迫ってきた。この仏塔内へ避難させたいと思うがどんなものだろう、という打診であった。

仏塔内へ王妃を隠匿するわけにはいかない。じきに秘密が露顕してしまうし、信者たちと与える影響も好ましくない。しかし、「とにかく何とかするだけでは言っておいた。サビヤよ。お前はどこかこの近くに王妃を隠すすふさわしい場所に心当りがあるろうが」

とマトナ師は探ぐるような眼を向けてき

た。

「さあ、とくにございませぬが……」

「しばしば姿をかき消して謎の時間をすごしてくるではないか。そこでもかまわぬのだぞ」

この人はタパス尊者の隠棲洞窟を知っているにちがいない。だが、そこへまで追尾してきたり、あからさまに言わない点がマトナ師の陰湿さである。

それをあからさまにしてしまえば、否応なくタパス尊者と対決しなければならなくなる。対決すれば仏塔教団の改革について両者は火花を散らして論戦をしたり、教団内諸師の賛意を獲得するために走りまわらねばならなくなるだろう。

「どうだ、サビヤ。明日にでもお前は朱駒波城内へいって駱駝夫人をお連れしてこい。先方は一刻を争うような気色だった」

「はい……」

力なくうなずきながら少年は胸で自分に言い聞かせた。

必ずしもタバス尊者の洞窟に限ったことはあるまい。あの付近には幾らも自然洞窟があるはずだ。そのどこかを王妃の避難場所にふりあてればよいではないか。

「さあ今日の講義にかかろう。昨日は釈尊が霊鷲山を旅立って、ガンジス河を渡りコーティ村へゆき、そこからナーディカ村へきて、煉瓦堂へ滞在なされたところまでだったな」マトナ師は二枚目の樹皮を取り出して、ゆつくりと音読しはじめた。少年サビヤは姿勢をただして聴き入った。

煉瓦堂とは、当時木造家屋に葦で屋根をふいたインドでは珍しい建造物だった。ナーディカ村は、すでにギリシャ系ヴァッジ人の勢力圏でアテネ風の石造家屋が造られていたのかもしれない。

そのナーディカ村に滞在したあと、釈尊はヴェーサーリーの街へはいってゆく。

そこは栄えた商業都市で、ヴァッジ人の首都だった。すでに釈尊は幾たびも訪れて説法

をし、信者が多かった。彼らから大歓迎を受け、釈尊は郊外にある遊女アンババーリノの別荘に落着いた。

十七

マンゴーの繁るその別荘は快適な環境だった。人々は集ってきて釈尊の説法に耳を傾けた。そのころ釈尊の体調はだいぶ衰弱していたようである。

「釈尊はこのままヴェーサーリーの地に滞在したい意向を示された。しかし阿難はこれに反対して旅を続けることを促した。經典の筆者は此処にあるように意味深い言葉を用いている」

マトナ師が指示した文章は、

——かれの心が悪魔にとりつかれていたからである。

これであった。

「悪魔とは、何でしょうか」

サビヤは問いたださずにはおれない。

「殺す者という意味だな。このあとを読むがいい」

同じ文章が三度もくり返された。つまり積尊はこの地に滞在してそのまま涅槃へ入ろうと希望されたのだが、阿難はなぜか旅の続行を固執した。その「なぜか」を、悪魔にとりつかれていたからだとする。

少年サビヤは三枚目の樹皮を読みはじめた。すぐにそれを置いた。

「ここで積尊の前にほんものの悪魔が現れるんですね。阿難が去って、離れた樹下で眠りへ入ると入れかわりに」

「うむ、悪魔はこの場で即座に涅槃へ入ることを積尊にすすめる。しかし積尊は三カ月後だとおっしゃる」

「これは、どういうことなのでしょうか」

「古来、論議を呼んでいる箇処なんだな。単純な主張が、積尊はどのお方は病魔——悪魔をそう解釈して、病魔なぞの命ずるままには

ならない、という考え方だ。でも私は賛同しがたい。この悪魔との対話のあと、積尊がおられたチアーバーラ靈樹の園で大地震が発生する。その天変地異を積尊は阿難に説明される」

樹皮を覗きこもうとする少年を手で制し、マトナ師をそれを手渡ししてきた。

「ゆっくり読め」

と命じた。

「はい」

「いや、サビヤよ。もう刻限だ。お前は朱駒波城へ出発しないと夕暮れまでに到着しないぞ。深夜のうちに王妃を連れ出さねばならない」

「いつ経典は読んだらよろしいのですか」

少年サビヤには用事が山積していた。沙門竜猛の要請にこたえて駱駝夫人をこの大崖仏塔へ案内して来なければならなかった。しかも隠れ場所をどこにするか。それも未だきめていないのだった。

「朱駒波城への道々熟読するがよい。敏とお前ならそれまでできるだろう」

「ではこれをお借りしてもかまわないのですか」

「だいいじにして、失わないようにせよ」

「はい、命にかえまして」

「私はすでに全文をそらんじているゆえ、失っても痛痒は感じない。ただこの地域では絶対に入手不可能な貴重な経典だ。樹皮一枚が欠落しても用をなさなくなる」

そのとおりであろう。あのタバス尊者ですら未開未見だと言っている。

少年サビヤは誘惑にかられた。ひと目でもいい。あの尊者に披見させてやりたい。恰好な口実があった。連れ出した駱駝夫人の落着き先を未だ決定していないのである。マトナ師の暗示に従ってタバス尊者の洞窟へ連れてくることだ。その領解を得る、という立派な口実が成立するではないか。

午睡を楽しんでいたタバス尊者は、「大バ

リニッバーナ経」の断片を示された時、数行を黙読しただけで全身に活気をよみがえらせた。

「この経典を、どこで手に入れたのか」

「マトナ阿闍梨からお借りしました」

「こんなものを所蔵しておったのか。これは珍しい浄土経典じゃな」

「浄土経典……」

「阿弥陀経と大無量寿経の一部が併記されておるぞ」

あとでサビヤは朱駒波城へ向う道で熟読して納得したのだが、釈尊は阿難に涅槃へ入る生命体の形象を青、黄、赤、白の色調で表現する。肉体という物質は死滅によってそれらの色調を失ってしまうが、入涅槃が完成されると、青色は青光を放ち、黄色は黄光を放つとする。「阿弥陀経」が極楽浄土の莊嚴を赤色赤光、白色白光と表現するのと同じ発想である。

また釈尊は、自分の教説を信奉するすべて

の男女が、正しい修行者として完成しない限りは自分は絶対に涅槃に入らないだろう、と誓ってゐる。これなぞは阿弥陀仏の四十八願と、数でこそ隔たりはあるが、全く同一の姿勢である。

たちまち樹皮一枚を読み終えたタバス尊者は、

「続きはどこにあるのか」

と熱っぽく訊いてきた。

「いまマトナ師のもとで学習中でございます。それよりも尊者、此処へかくまって欲しい人をお連れしたいのですが、許して頂けるでしょうか」

「誰をかくまうのかな」

「それは申し上げられませんが、高貴な身分の女性なのです」

「女性か——」

「如何なものでしょうか」

「わしはかまわぬ。先方の人さえ嫌だと言わねばな。何しろネズミや禿鷹とだって一緒に

暮したわしじゃ」

沙漠の体験を思いうかべてタバス尊者は笑った。

サビヤは小おどりして洞窟を出た。朱駒波城への道を急いだ。歩をかさねながら樹皮の文字に眼をさらした。

タバス尊者が指摘したとおり、釈尊が悪魔のすすめを振り切って、三カ月後に涅槃へ入ると宣告した真意には、「大無量寿経」が明示した法蔵比丘が阿弥陀仏となる「その仏と成る」実体を語りかけているように思われてならなかった。つまり浄土教が説く阿弥陀仏の救いとは、釈尊その人が涅槃に臨んで悲願としてたてられた万人救済を象徴化したものではないが、と納得できるのであった。

ただし、マトナ師洞房の岩棚にはなお数枚の樹皮が残されている。「大バリニツパーナ経」の後半部が語る釈尊の涅槃とは、どんな内容だったのであろうか。

少年サビヤは朱駒波城内へはいった。すで

に深い闇が城壁を浸たし、案内をする乳母のカナウジ以外に人影は全く見あたらなかった。城壁上に立つ兵も此方へ背を向けたまま、見咎める様子もない。すべての手筈がととのっていたようだ。

駱駝夫人の後宮には沙門竜猛が待機していた。お迎えにきたむねをサビヤが告げると、竜猛は上機嫌に顔をほころばせた。

「マトナ師は決断に迷っていたようだが、意外に早かったのう」

「でも御案内する先は大崖仏塔ではございませぬ。近くにある別の摩崖です」

「かまわぬ。いや、なおのこと結構だ。あの仏塔ではやはり人目に立つ」

食事が出た。出発はもっと夜が更けて訶利多種王が眠ったのを確認したあとがよからう、ということになった。

サビヤが食事をしている間に駱駝夫人は席を立った。王の夜伽をして寝かしつけてくると言った。

だが、じきに戻ってきた。

「沙門、お呼びです」

「わしをか？」

「またいつもの病いが……」

「そうか。早く眠ってくればいいが、夜っぴで騒がれたのではたまったものではない」

サビヤはあの日、天井の一隅から覗き見た光景を思い浮かべる。「青衣の鬼」訶利多種王は罪に悶え苦しみ、沙門竜猛の折檻を受けて泣きわめくことでその苦しみを軽減しようとするのであろうか。嗜虐愛好者のゆがんだ発作が、今夜また起きたというのである。

「でも少しおかしい」

「なぜですか」

乳母の問いに、いつも自分を同席させるのに今夜に限って沙門一人だけを招くとは、どういうことだろう、と眉をひそめさせた。

「様子を覗いていらっしやい」

乳母のカウナジは後室を出ていった。何

か不吉な予感でもしたのか。駱駝夫人はすでにひととおりとめてある手荷物の点検にかかった。

乳母が顔色を失って駆け戻った。

「王妃さま、たいへんでございます。沙門さまがひどい責め苦を受けておいでです」

「えっ、責め苦を」

「一刻も早く逃げませんと王妃さまも危うございます。王は、沙門とあなたとの仲を疑うって沙門を打擲しているのです」

「やっばり……」

駱駝夫人はよろめながら立ち上がった。

気まぐれな訶利多種王は、今夜は被虐者ではなく加虐者に変貌して沙門竜猛に折檻を浴びせているのだった。

十八

かねて用意してあったのは二頭立ての馬車

である。いちおう馭者台へ坐ってみたが、手綱さばきはしつくりいかず、馬は走らなかつた。

サビヤはすぐに馬の背中へ飛び移った。山家育ちである。裸馬を乗りこなす自信はあった。右側の馬にしがみついて、他の一頭のタテ髪を引きずるようにして走らせた。馬車は深夜の街筋を抜けていった。幸い、追手らしい馬蹄は未だ背後で響いていない。

街を出外ずれると、道は二手にわかれた。坦々と谷添いにつらなっている街道と、岩山へ分け入ってゆく急坂である。そこでサビヤは駱駝夫人と乳母カナウジを馬車からおろした。

「ここからは歩きましょう」

「馬車は？」

「勝手にあの道を走らせませう。追手が来ればおそらくあれを追いかけるでしょう」

空らになった二頭立て馬車は木輪を響かせて街道の彼方へ走り去った。

☆☆

案
内



結果的にこの選択が成功した。追手の馬群は、やがて街道をまっしぐらに追跡したのだった。すでに歩き慣れた山道へサビヤは入っている。女たちを励まして登り続ければいい。

深夜の逃避行でサビヤは女性たちにひと声だけかけた。

「王が疑ぐったというあなたと沙門との間はほんとうなんですか」

これを乳母のカナウジが強く否定した。

「そんなことは絶対にありません。妾が許しません」

サビヤ自信もふと疑ぐっていたものだ。彼らの親密な間柄は信仰という純粋な心の結びつけだけであったのか。

女二人をタバス尊者の洞窟へ落着かせたのは、夜も明けそめる刻限であった。

いくらかも眠らなかつたのに、またきわどい逃避を経験したばかりなのに、少年サビヤは朝の礼拝へいつもどおり参加した。そのあと

マトナ師の洞房へゆき、きわめて事務的に昨夜の顛末を報告した。そして、すぐに「大バリニッバーナ経」へ話題を転じていった。

タバス尊者からヒントを得た浄土思想の混入を告げると、マトナ師はにっこり微笑んで、

「じつは私の解釈も全くそれなのだ。釈尊の涅槃こそが浄土思想の源泉となっている。その状況がきびしいだけに、いっそう信じたくなる」

「状況がきびしいとは、どういうことですか」

「じつくりとこれを読むがいい。これで全部だ。読み終えたところで私の意見や注釈を聞かせてやる。二日でも三日でもかけるがいい」

残った樹皮四枚をそっくり手渡してきた。欣喜勇躍の思いで少年サビヤは宿房へ戻った。そこは大磨崖の脇にある小岩山の鞍部をくり抜いた洞窟で、仏塔に常勤する修行僧た

ちが住みついている。

眠むけも疲労もなかった。樹皮の文字を一つ一つ食べつくしてしまふように読みすめた。二日、三日を待つ必要はなかった。うっかり夕べの礼拝に出るのを忘れてしまったが、宵の口にはすべて読了した。

こんな刻限だ。仏塔へマトナ師を訪ねるわけにはいかない。摩崖を大きく迂回し、歩き慣れた道をタバス尊者の洞窟を目ざした。

駱駝夫人はおそい夕食を食べていた。尊者が食事にいった折、ひそかに持ち運んできた麦麵だ。サビヤは俄かに空腹をおぼえた。礼拝に出なかったために夕食をとりそこねていたのである。

「もう一碗、どうじゃな」

タバス尊者はやさしくすすめる。麦麵は一人前そっくり残っているではないか。

「二人前、持ってきたのですか」

生ま唾をのみこみながら訊いた。

「きまっているじやろう。お客さまは二人

だ」

「カウナジーさんは？」

「街へ帰ってゆきました」

王妃が答えた。

「お城へですか」

「はい。沙門さまがどうなったか気がかりです」

「大丈夫なんです、そんなことをして」

「あの人は城兵に仲好しが多いから、うまくかくまってくれるでしょう」

「その麦麵、ではわたしが頂戴することになります」

いまのサビヤには食慾を満たすことが先決であった。

夕べの礼拝に出そびれた理由を語っていると、当然「大バリニッバーナ経」へ話は触れていった。タバス尊者も待ち望んでいるところだった。

釈尊がヴァッジ人の首都を離れ、クシナラーの沙羅双樹林へ到達するまでの道筋をサ

ビヤは語った。村々を経て、釈尊と阿難はマツラ族の領域内へはいってゆく。

マツラ族——末羅族とは、どんな種族であったか。王権国家ではあるが、その王は特定の家柄の出身者が世襲で独占した地位ではなかったらしい。一般から順次にえらんだ公選の大統領みたいな王だったという。当然、共和制をしいており、民衆の殆んどが商業にたずさわっていた。一枚の布で腰から肩をおおい、頭頂にまで伸ばしてターバンとする風俗。その布が夜は何人も分とつなぎ合わせて天幕にもなった。

この点はあとで詳しく触れるが、マツラ族はジャイナ教の強い影響下にあったようである。釈尊はこの異教徒のまっただなかで最後の短い生活をおくった。

若い鍛冶工チュンダが献じたキノコ、あるいは豚肉とも……それを食べて激しい下痢に悩まされる。商人ブッサクを教化した。また帰依を熱望した修法者スバダに仏法をつた

え最後の門弟とする。

やがて沙羅双樹のもと、北枕で右脇を下にして横たわり、静かな臨終をむかえるのである。

——さあ修行僧たちよ。お前たちに告げる。「すべての事象は過ぎ去るものである。怠ることなく修行を完成させよ」と。

これが絶句となった。

少年サビヤは、ここまでを一気に語り尽くした。字句の表現に誤差はあったが、内容は「大パリニッバーナ経」を忠実につたえたつもりだった。タバス尊者は涙ぐんだ。

「そこまで世尊の涅槃を詳細に追った經典に触れたのは初めた。不明なことであった。なぜもっと早く……」

何種類もある「涅槃經」で、このパーリ語經典は流布が偏向していたようである。

(つづく)

『好評』

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B6判函入 二七五頁 定価 三五〇〇円(〒二五〇円)

〔普及版〕B6判二三五頁 定価二八〇〇円

○仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とその真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、語りかけようとする――

△発売▽

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四

振替 東京〇―一九〇〇

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 十二月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年十一月二十五日 印刷
昭和五十九年十二月一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷(株)

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒113 振替東京八―八二―八七番

(新)
(刊)

『浄土宗のおつとめ——日常勤行式——』

著者

大正大学教授・文博

真野龍海

B6判 一〇〇頁 定価六五〇円(〒二五〇円)

[五十部以上二割引定価五二〇円 下無料]

◎平易にかつ丁寧な解説がほどこされた日常勤行式のお話。日々の信仰生活のおつとめに、全二十三節からなるやさしい解説文がお役に立ちます。著者の真摯な人生論としても、また広くおすすめしたい好著です。

(発売) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会

電話(〇三) 二六二―五九四四

振替(東京) 八一八二二八七

第五十卷

十二月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十九年十一月二十五日印刷 昭和五十九年十二月一日発行